

はじめに

2024年12月に発刊された『臨床の玉手箱』の第2巻『保存修復編』は、齶蝕や外傷で失われた歯冠形態を復元し、歯髄を温存して最小限の侵襲で歯を保存に導く分野であり、監修の大谷一紀先生が、ご自身の高い技術力、修復材料に及ぶ深い見識、そして何より日本の臨床を牽引している多くの臨床医につながる人脈の広さを如何なく発揮され、保存修復学を69項目の的確で簡潔なフレーズで総括してくださいました。日常的に当たり前のように繰り返される臨床行為のレベルアップの重要性や難しさへの提言と理解しました。

第3巻となる本書のテーマは、多くの臨床医が悩む「歯内療法学」です。言わずもがなですが、歯内療法学とは歯髄や根尖周囲組織の疾患・外傷の診断、予防、治療を行う歯科保存学の一分野で、齶蝕や外傷で感染した歯髄を取り除き、根管を清掃・消毒して歯の機能回復を図り、保存することをおもな目的としています。第1章「検査・診断」は、医療面接からスタートし、早々に歯科用コーンビームCTや歯科用実体顕微鏡（マイクロスコープ）が診断にも活用され、悩ましい治療介入時期へのアドバイスも忘れません。第2章「歯髄保存療法」では、歯髄診断から断髄を交えた歯髄保存療法まで話題は及び、露髄＝抜髄ではないことを紹介しています。第3章以降は、歯内療法の前処置から従来の歯内療法の各ステップに沿って話題は展開され、基本事項から最新の知見まで網羅しており、終盤では難症例への対応・外科的歯内療法・メンテナンス・歯髄再生療法まで裾野を広げています。全編を通じて、先人たちがかつて二次元のエックス線写真と手指の感覚で挑んだ見えない根管が、間違いなく可視化されていく「時の流れ」を実感させてくれます。

本書の監修・責任編集を一手に担ってくださった岸本英之先生は、平井 順先生・鈴木 尚先生のもとで臨床研鑽を積み、日本歯内療法学会や日本顎咬合学会で培った広大な人脈を駆使して本書の発刊にご尽力してくださいました。その取り組みは、大学・開業医の垣根を超えて、歯内療法学の未来を見据えた試みのように映りました。

本書が読者の皆様の良質な臨床経験の1つになれば幸いです。

監修 鷹岡 竜一